



愛宕神社の拝殿で祝詞があげられる

“宝田へ行くなら24日は避けよ”という言葉があります。なぜかといえば、毎月の24日だけは一切酒を飲まず、来客者にも酒を出さないという珍しい風習が残っているからです。「今でも宝田では、結婚式や葬式は24日には行わないですよ」と地元の人は言います。

その由来は、昔、隣村との境界争いに勝つため、愛宕様に祈願し、縁日(24日)には酒を断って成就したという説や、祭礼の夜、酒を飲み火の不始末から出火した村人が、これを愛宕様のたたりと考え、その後縁日には酒を飲まなくなったなどの言い伝えが残っています。

愛宕神社は、<sup>ほむすびのかみ まつ</sup>火結神を祀り、昔から「火伏せの神様」として広く知られています。『印旛郡誌』によれば文禄三年(1594)の創建とされ、地元では「お愛宕様」の名で親しまれています。

愛宕様の信者は、講社(団体)を組織し、現在、市内を中心に富里市・八街市・栄町などに約3,000人の講社員がいます。毎年2月24日



終戦後から昭和30年代半ばまで行われた地元の素人演芸大会のスナップ(昭和33年 山田隆司・海保正氏所蔵)



祭礼当日に出た露店と参道を埋め尽くす参拝客(昭和31年 山田隆司氏所蔵)

の祭礼当日ともなると、参道には20前後の露店が並び、神社付近の通りは人の往来が絶えず、この日ばかりは静かな田園地帯も大いにぎわいを見せます。

神社の運営は、宝田7地区の中から選ばれた3人の神社総代(3年交代)が中心となります。総代は、初年にすべての講社の世話人(代表者)にあいさつ回りを済ませ、万一講社員の家が火事になると火事見舞いにも行きます。そして祭礼を行うために、前年の11月からお札の作成などの準備を始めます。

祭礼前日は若衆によるお籠もりが行われ、当日、代参と呼ばれる講社の代表者に出す赤飯弁当は、15年ほど前までは、宝田全戸からもち米を集め、夜を徹して総代の家で親戚や<sup>くわ</sup>郭(班)の人たちに協力してもらいながら用意したそうです。また、宝田に来た花嫁・花婿が、初めての祭礼に参拝する伝統は、今も残っています。愛宕神社の祭礼は、地元の愛宕様への深い信仰と快く信者を迎えようとするために、大勢の人々が労を惜しまない宝田最大の年中行事です。

# 成田歴史玉手箱

●21回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

火伏せの神様

宝田の愛宕神社

2月24日、静かな田園地帯がひとときわにぎわう日

## 編集後記

もうすぐ春。すべてのものが輝き出すすばらしい季節です。ところが春はまた火災の多い季節でもあります。昨年3月の松崎・佐野地区同時火災などは記憶に新しいところです。昨年、市内の火災件数は72件で、その内3~5

月に24件も発生しています。さらに驚くのは、6~8月の夏場に23件も発生していることです。冬と比べ、火に対する警戒心が緩むのでしょうか。とにかく「火の用心」をしなくてよい季節などありません。